

---

月 刊

---

# MéLange

---

Vol.137

---



---

2018.11.25

詩と評論

---

月刊「Mélange」

Vol.137 2018.11.25

「月刊めらんじゅ」編集部

## ◆ 1 脳外科病棟の夜

岩脇リーベル豊美

復活祭の前後に手術を受けたドイツ姓を持つ  
自称ヴェネチア出身女性の頭には髪が伸びはじめている  
医師たちの回診では毎朝今日が何曜日かとの質問を受けるが  
毎朝答えられない  
まだ二十代前半の甲斐甲斐しい男性世話人を  
エレガントだとやはり毎朝の洗浄の後に褒める  
マリア要塞や巡礼教会を咽喉鼻耳科病棟が遮るが  
病棟の窓をパノラマと名付けた  
背後の菜の花畑が遥かに煙る  
私はあなたが同室でよかったと思う  
でも  
寝起きはイタリア語で鼾はドイツ語だ  
ドイツ人とはドイツ語で応答するが  
何故か私はイタリア語で話しかけられる  
無意志状態ではnon capito -  
疲労極限状態に於ける携帯電話の翻訳アプリ検索で出た  
Come si dice questo in italiano? にも  
benissimoと褒めてくれた  
来週家族の住む独仏国境近くにあるレハ病院に移ると聞いたが  
どうしてはるばるこの地のこの脳外科に来たのかと訊くと  
とても優秀だからだとしっかりと答えた  
私の場合は脊髄炎症なのか腫瘍なのか入院検査でも見つからないが  
とりあえず今晚退院してもいいとのことで  
彼女はこの時だけドイツ語でIch bin so traurigと言うのだった  
理学療法士の女性が彼女を抱えながら後ろ向きで歩くたびに  
躓かないように気遣う老女に  
知能は壊れたとしても純粹理性が脳にあるわけではないのだと知る  
壁にかかったカレンダーの最後の月は雪に埋もれた巡礼教会  
まだ遠い将来のことに感じるが  
よくなったらまたおいでIch bin so traurigと言うのだった

### 詩

- 1 脳外科病棟の夜……………岩脇リーベル豊美 03  
全長数センチメートルの弟……………中嶋康雄 04  
不在であること……………にしもとめぐみ 05  
ばかばかしいはなし……………北岡武司 06  
しがらむ……………大橋愛由等 07  
素のじかん／しょうじょう……………秦ひろこ 06  
埋もれた句帳から……………野口裕 10  
おおりり……………高木敏克 11  
クラブ・アップル……………月村香 12  
緑の記憶……………富岡和秀 13

### エッセイ

- 奄美俳句を読む……………大橋愛由等 14

### 連載

- 神戸詞あしび 126 「文楽一泣き節の太夫 て戦闘芸能の深み堪能」……………大橋愛由等 16

編集部日より★56／今年2月に小学校を卒業して50年が経過したことを記念して同窓会が開催され参加した。わたしが通った西宮市の私立小学校はカトリック系で、神父やシスターがいた。幼少期にキリスト教、特にカトリックの世界に生きることは、その人の人生に大いに影響を与えるものだ。学校生活で一日になんども十字を切った。その十字を切るという行為を、プロテスタントのほとんどの宗派は行わないことを知ったのは、恥ずかしながら最近のことなのである。カトリックの手法がキリスト教のすべてだと信じていた。少年期は反抗もするが、全面的に状況を受容する時期でもある。プロテスタントはひたすら心の宗教であり、聖書というエクリチュールを媒介にするにせよ、〈神〉と直接対峙できるのに対して、カトリックは司祭という絶対的な媒介者が立ちほだかるのである（よくわかる例として、カトリックのミサでは何度も信者が「司祭とともに」を唱和することが要求される）。媒介者としての神父の存在は大きく、少年にとって、神の代理人として君臨しているような感さえあった。カトリックはその世界に生きる人を身ぐるみで包摂してしまう魔力がある。生き方ばかりか生活の仔細までも毛細血管のごとく侵入してくるのである。こうした宗教説包摂を受容するのか拒絶するのかが、カトリックの信仰の現場で問われているのだ。★第137回「Mélange」読書会は詩人の木澤豊さんの好評の「宮沢賢治語り」です。テーマは、賢治の初期童話である「やまなし」を取り上げます。サブテーマは「一死をふくむ風景」。なぞめいたストーリーです。賢治の作品は童話という形をとっていますが、いくらでも深読みできる内容です。（大橋愛由等記）

## ◆全長数センチメートルの弟

中嶋康雄

ガガンボが土塀と口吻を交わし続け  
羽が破れてゆく  
ああ、ガガンボとでもいいから  
性交をしたいと土塀の埃を食べながら  
強く強く思う全長数センチメートルの弟  
痩せさらばえた手の甲から  
剥離するのは儼なにか骨なのか  
「今年も炬燵の季節だね」  
羽が破れた母さんが呟き  
ガガンボがやつと母さんの子宮を奪った  
苔が湿った寝床  
出て行け出て行け出て行け  
今日も売れ残りの鋏を売り歩いた  
昨日は売れ残りの鋸を売り歩いた  
今日も売れ残りの鮎を売り歩いた  
昨日は売れ残りの泥鰌を売り歩いた

弟が空気の良いところを全部吸ってしまった  
ビニール袋の中でつまらないものと暮らす  
弟の悪い息がビニールを白く白く濁らす  
ビニールの口を開けてやると  
弟は大きく深呼吸して心臓を撫でた  
弟は兄と喧嘩をしようとするが  
馬鹿じゃないのか  
兄は身長がまともな人間だ  
ガガンボみたいに愚鈍だけれど人間だ  
冬になるとガガンボが卵になつてしまうので  
弟は土塀の埃を食べながら  
雪を見ていた  
雪はただの無生物だから  
「性交できないなあ」  
幅がどんどんなくなつてゆく弟は  
いつ透明になつてしまうのだろう  
ビニールと見分けがつかないじゃないか  
ゴミと一緒に収集されて  
燃やされてしまうじゃないか  
かわいそうじゃないか  
せめて弟に最後の性交を

## ◆不在であること

にしもとめぐみ

それは 天使たちでした  
五人いたでしょうか  
走り回ったり  
笑ったり  
ちいさな笑顔が明るく照らすのでした  
あなたはもう動くこともなくなり  
静かに横たわっているのです  
いいえ もうそこにはいないのかもしれない  
もっと 自由に美しいところへと  
飛翔して行ったのでしょうか

空は このところあまりに美しく  
見上げると  
澄んだ青がおおに重なり  
天上では  
いなくなつてしまつた人たちが  
ひしめきあつているというのに  
静かなしずかな空でした  
陽は東から神々しく目を覚まして  
一日の暮らしを紡ぎます  
陽はまた 見届けるように西に沈んでいきます  
何回もなんかいい陽を見るでしょう  
冥府へ降りていくにも  
歌う うたも持たないのですから

## ◆ばかばかしいはなし

北岡武司

三七℃の日が暮れます  
まだ明るいけれど水撒きをしましょう  
庭の木陰はまだしも  
家とお隣では まえの舗道が  
昼間の熱を吸い込んだままです  
それでも涼しくなるような気がするのです  
ホースの先を飛びだした水が水煙をあげ  
路面に湯気があがります  
焼け石に水のようにです

人のすることは焼け石に水 でしょうか  
不条理 ばかばかしいと  
拗ねてもはじまりません

条理レゾンでわりきれば  
わりきれないことばかり  
わりきろうとするのが  
まちがいなのかもしれません それでも  
僕らのしていることはなにもかも  
焼け石に水 でしょうか  
理を尽くしてわかる意味なんて  
ありはしないのです  
冷房の効いた電車から  
蒸し暑い夕暮れに降りたった人が  
家路を急ぎ 一隅に路面の黒っぽい湿りを見  
涼気をホッと喜んでくれますように  
水煙がアスファルトの舗道に踊ります

## ◆しがらむ

大橋愛由等

青鯨は見果てぬ岬をむずがゆく回遊しつづけはしない  
(不全に満たされた海図をさきおとついで何枚も切り裂いていた航  
海長は面長の三等航海士がいちはやく海風の風速を読みとること  
にいらだち、孤島の灯台を遠望しつつ、「今日は一体何本の潜望  
鏡が立っているのだ」と不機嫌な朝焼けの北空に向かって言おう  
としていたその頃、三等航海士は故郷の工業都市にそびえ立つ煙  
突と避雷針の垂直性を考えるばかりで、持参した『狐物語』をは  
らはら読みながら、少年時代に動物園で狐に語りかけられたこと  
を思い出し、「わたしはきょうだいを捜しにこの動物園に来た。  
あなたはわたしの兄だ。わたしの言葉が分かるだろう。わたしは  
狐に産まれ、あなたは人間に産まれた」と語りかけてきて、その  
時から逃れられないモノガタリのさなかに生きていく覚悟ができ  
てその年の夏休みは毎日のようにノオトを持って「妹」に会いに  
行き記述していたある日、「兄さんにこれあげる」と妹は吐息を  
顔に向かって吹きかけ「これで兄さんはどんな風もその強さ、弱  
さ、賢さ、ずる賢さが分かるようになるの」と言われ、その時か  
らすべての風のありようが識別できるようになり、航海長は五年  
前道行きを決心して断崖にふたりで向かったのだが、その時吹い  
ていた風が禍々しすぎたので、二人はおずおずともと来た道に戻  
っていったことも見えてきて(風にあたったな)と判別するその  
ありようが航海長に見ぬかれ、風速4がつづく日のいらだちは、  
三等航海士がそばにいないくても分かるほど、回遊しない魚群の群  
れの寡黙なざざめきに似ていた。

## ◆素のじかん

秦ひろこ

きわどいせとぎわで  
ノルマのしごとによろようぶりおど  
いびつにまめつしたしんしんが  
とび乗るくるまのしんどうに  
しだいにゆるんでだつりよくして  
ながれるびあなのつぶおとの  
うっとりすみずみまでみえてきて  
からだごと  
素すになつてただよっているよ

いつものみちすじ  
じょうけんはんしやで目がとまる  
だまって逝いつたYの家  
みぎにまがれば  
じぶんでいのちを折おつたEのしごと場  
かれらのとびらが

## ◆しろうじょう

秦ひろこ

おそらく  
つうそうていおんなだろう  
わたしのさいぼうをひたしている  
このじきの  
このしゅのもの

ああするたびにおこつてくる  
たんだくのへいそく  
ほうきはしないけれど  
ひていひてい  
ふとしたおりになりだすその  
せなかをさすり  
ふとんをかぶせてたいおうし  
そのうちまぎれてやんでいくが  
ちいさいころ  
ねっこのあたりがすすうすると

通るたびにひらいてきて  
ゆらゆらふりかえる  
あんなこと こんなこと

それらはわたしじしんにとうえいして  
がくせいしてしごととして いくじもかいごも  
なんとさまさまにながく生きたか  
とんでくるポールを打ちそこねては  
いまだぼこぼこデッドポールの日々のなか  
わたしはいまわたしであつて  
ここにこうしていきをして  
くるまをうんでんしていることが  
みようにふかくかんかくされて  
みじかいあいだの  
じぶんの生のふしぎのかくせい  
店のわかいおんなのこが  
にこつとわらつてうけとつて  
かたから重石おもしがすべりおちる  
カタのひとつ片ついた  
からだのなかがあかるんできて  
あそこでパンを そのドラッグストアで…  
目さきのがわきあがるまえの

みみのおくより  
ひいひいひいひいひいひい  
たかいおとがほそくのびた  
こしぼらくのしろうじょうも  
あのことからのじぶんひとり  
よるべなさの  
へんけいなのかもしれないか

そうであるならいまのこれは  
うまれたときよりわたしにともなう  
じぶんのけいこう  
すでにじゅうぶん  
わたしのせいぶん

いい子だ  
これもあつかいかたかもしれなくて  
そだてばいつか  
じぶんのみかたになるだろう  
そのあたたまをなでながら  
つぶやいている  
きもち  
つきる  
な

## ◆埋もれた句帳から

野口裕

半年前に退職し

そのころにコンピュータが壊れた  
ハードディスクに移していない句帳が一冊残った  
パラパラとそれを眺めていると  
色んな句が目飛び込んでくる

朗唱の小人 電車カクト

何考えてこんな句を作ったのか

受け売りの名人と買う涙かな

受け売りの名人と誰のことだ

あ俺か 俺が俺と買物

おまけに涙とは

内臓を抱えたままに鳥帰る

鳥に己を託したつもりはないが  
そう読まれそうだ  
危ない危ない

酸性雨止めの塗料をかけられてつるんとなった孫文先生

ところどころに短歌が混じっている  
これはちよつと面白いと思うのは俺だけかな  
まあ 鳥に己を託すよりはましだ

砂利が流れて今のは撰津本山か

いつも途上なのだ

残務に憑りつかれていたこの頃  
退職すればタガが外れて  
五七五も五七五七七も

その他のもろもろも

何も書けなくなってしまうかもしれないと思っていた  
それも良いかなとは思っていたが

その頃の句帳は埋もれて  
二冊三冊と句帳は更新されて  
なお途上

## ◆おおるり

高木敏克

森の中には様々な捜し物があった。時間の止まった森の空気の中では、木の影に古い記憶が潜んでいて、静かにこちらを窺っている。凝りの構造は夢の構造に似ている。夢を見たいときには森に行けばよい。亡くしたものを捜すときには森に入れば出てくる。

でも、森に入るときにははっきりとした理由がいるのかどうか、むしろ少女はねむるように森に入っていたのだから。

やがて、苔むした大木の向こう側に陽だまりになった小さな草場が見えてくるにちがいない。あるいは、それは森に住む独り暮らしの老人の自家菜園かも知れなかった。そこだけが光に満ちていて、白い帽子の少女が大きな昆虫採集の網を振り回しながら飛び跳ねている。

遠くから、『帰ってらっしゃい!』と呼ぶ声が出ている。ところが少女は背中を向けて決して振り向かない。その声は森のもつと深いところから聞こえてきたのだ。少女は降り注ぐ金色に輝きながら掛け巡り、やがて不思議な時間に立ち止まった。

灰色の森の中に白いバンガローが現れたのだが、その影は青い。不思議だなあと思いつつ近づくと、青い苔がびつしりと生えている。森の灰色を突き抜くラビストラズリーの青である。その小さなドアの中にも青い黴がびつしりと生えていて部屋は夜空に抜けている。

綺麗だなあと思って、しばらくそれに見とれてみると、鳥の羽が彼女の肩をたたいた。

振り向くと、大きな体の老人が背後に立っていて、腰をかがめて彼女に顔を寄せ、内部の青い闇を覗き込もうとしている。

「だめだわ。この中、本当に真っ暗よ。何も見えない」

少女がそう言うと、老人はゆつくりと頷きながら、優しく笑い、音もなく、青い闇の中に消えていった。

少女を見失ったのは老人を見失った証拠だ。森が見えなくなったのは森に迷った証拠だ。森の内部は地図に描かれたことがなかった。激しいおおるり

の聲が飛び交っていたが姿は見えなかった。枯れ草を踏みながら歩いていると、不思議なことに気が付いた。この森はもともと畑地に違いなかった。なんとなく畦道の跡が残っていた。少なくとも五十年ほど前にはそのあたりは段々畑に違いなかった。しばらく歩くと小さな溜池があり、光が差し込んでいた。池ノ上だけ森の天井が抜けていて青空が見えた。池の上には小さな虫が舞っていた。鳥たちはそれを狙っているように違いなかった。藪の中の地形は地図にはなく音楽になって、行き場のない時間が闇の中に溜まっていた。森の中にはいろいろな捜し物があった。時間の止まった森の空気の中では、木の陰に古い記憶が潜んでいて、静かにこちらを伺っていた。おおるりと呼ばい戻せばすべてが帰ってくる。消えた者には語りかけるしかない。

「夢の中では、無条件に物語りを追いかけるのは何故だろうか?」  
と僕は見えないおおるりに尋ねていた。

「生きている限り、生存の内部では、見えないところで止まらない物語りが続いているからだろう。ちょうど森の中のように僕たちは夢の中に迷いたんだ。そうしている限り僕たちの内部の物語りは終らずに、僕たちも死ぬことがないんだ」

と、おおるりの声がかえった。涙が落ちてきたので枯草の間から二つばかり拾ってみた。  
落葉樹の森は何処までも続いた。足元で、櫛の枯葉がカサカサと音を立てていた。だが、乾いているのは表面だけで、水を含んだ重たい葉が静かに腐りつつあるのが分かった。突然森が開け、日溜りの中にあの老人が現れた。枯葉が輝いていた。光の中の老人はこの世のものとは思えなかった。僕は重力の無い非現実の世界に迷い込んだのかと思った。老人は枯葉の中から何かを掘り出していた。盛んに鍬を動かしていたが、無駄のない老練な身ごなしに、僕は見とれてしまっていた。

「ほら、言葉だよ。お前さんの探している言葉だ。手に取って見てみる」  
その当たりの土は、すべて言葉が死んで出来たものだった。

「死んで腐る土もあれば、どうしても腐らない土もあるわい」

そう言いながら、老人は大きな土塊を鍬でほぐしていた。

「こうやって、死にかけた言葉は時々掘り返してやらにやあならん。そうせんと、わしらは本当に眠ってしまうんじや」

「でも、そうやって掘り返している間も、われわれは夢を見続けているんですよ」と、僕は尋ねていた。枯れ葉の中でラビストラズリーがまた光った。

エクランは消えてわたしに命令する続きを創造したまえと十センチにも満たないわたしの万年筆はそのたびにいつつも金庫のダイヤルを回さなければ取り出せない失望の万年筆などないわたしはそれをよくどこかにやるけど苦しさも天空もわたしが見出したことばではなくどこからか降ってきたものだアジア大陸動詞の活用形みかんの季節アラビアの第十七夫人かるた取り裏切り並んだ豚もう少ししたらこれらのことばたちはくずれて勝手に造形されてくることばたちはどこまでの変形を認められるのかいや認められないのかどうしても伝わらなければいけないのかわたしであつてはいけないのかというようにひどく悩むときがあるたとえばこの右手にある正確に言えば八センチの万年筆にはどういふ意味がこめられているのだろうか君は本当にことばを信じているのか本当に伝える気があるのか空に似合う日は一月一日から数えて何番目の日なのか太陽は殴られたらなんと言うのわたしは進む一歩また一歩わたしもまた平手打ちをされても

## ◆緑の記憶

富岡和秀

「人間は結局一人だ」と呟いたのち九十歳の先導者は意識を失い、そののち永遠の旅にでた。その言葉とそれを取り巻く記憶を「緑の記憶」と名づけ、「結局一人」の人間であるZは舗道に敷かれた石畳の上に両足を交互に運ぶ。Zは歩道を歩きながら、奇妙な感覚を覚えていた。歩道がふわふわとした雲のような道であるという感覚。Zのふわふわとした心に響くのは内部の声である。それは声ということもできるが、音である。その内部の音に、心あるいは「意識無意識」は意味を探そうとする。歩む足が時にもつれるのは内部の音を聴こうとして聴き取れないもどかしさからである。それでも、そのような意味を探す旅に自覚して出発するのは、歩む足の底がズブズブと歩道の下に沈み込む感覚を持つからである。音は少なくとも「ズブズブ」と聴こえる。「ズブズブ」の音の響きから内部は触発され、「ズブズブ」は地下水の流れる音に聴こえる。

心身が蠕動し、やがて身体が上下に動き、浮遊と沈み込みを繰り返す。その繰り返しの中に、Zは浮遊域と沈み込み域に枝分かれして、Z1とZ2に分裂する。しかし、浮遊域でも沈み込み域でも感覚を研ぎ澄ませると、動いているはずのZ1とZ2は動いていない。周りの風景が動いているのである。浮遊するZ1の周囲が回る。沈み込むZ2の周囲が回って動いている。更にZ1はZ1・1、Z1・2・・・Zn・nへと分裂し、Z2はZ2・

1、Z2・2・・・Zn・nへと分裂する。ZがZ1、Z2・・・Znへと分裂を繰り返しても、周りの風景が動いているのである。Znは動いているという感覚がなくなる。つまりはZは分裂の繰り返しによって病になる。周囲が回ることによって病を抱える。いくら浮遊と沈み込みを繰り返しても、Zは動いていると思うのに、動いているのは浮遊する周りであり、環である。沈み込む周囲であり、環である。しかし、それによって澄んだ音が聴こえてくる。

自覚して内部の音の意味を探していたが、病を得て、音が澄んだのだ。それなら、意味とは「澄む」という事だろうか。Zの心は、研ぎ澄まされる事によって、浮遊域に天球を見る。沈み込み域に地球を見る。Zは動かない。あたかも坐禅する人間のように動きが止まる。しかし、周囲の天球と地球は回っている。分裂の繰り返し「遍歴」と名付けられ、「研ぎ澄まし」はその果てにやってくる。狂気のような話だが、「その果て」が世界の果てだろう。Zは動かない。周りが動く。環が動く。環との境目にZがいる。Zは結局一人だ。音に耳を澄ませて、狂気のように環の果てに、感覚を研ぎ澄ませる。その果てにも、しかし、謎は残るだろう。いかに研ぎ澄ましても聴こえない音が、無音に限りなく近いなにかが微かに波動を送ってくる。無意味な音だろうか。謎は・・・残る。この謎は、謎として残夢の果てに記憶されている轟のような事態だ。「緑の記憶」の原記憶だろう・・・いまや九十歳の先導者は原記憶の主だ。そしてZは、Aを求めて遍歴を繰り返す。天球にも地球にもスネークのような文様が仄見えていてではないか。

すでに〈新北風<sup>ミニニシ</sup>〉などは季語として定着している。こうした季語の選抜と創造は、身近に存在する植物や樹木、動物、自然現象（海、風の変化など）そして言語にまなざしを向けることへの自覚を促すこととなり、奄美ならではのあらたな俳句世界の創出につながっていくのではないだろうか。

③奄美の俳句で使用される言語のそのほとんどがヤマトグチである。シマグチばかりの作品も登場するが稀れである（漢字にシマグチのルビを振る場合もある）。これは俳句というのは標準語という統一規範によって成り立つ国民的文芸であるという要諦を奄美の俳人たちも踏まえていると思われるが、奄美の文芸としての自律を考える時、シマグチばかりの作品がもっと増えてもいいと思うのだが。

④短歌は〈私性〉を前面に出す表現も可能であるのに対して、俳句は境涯を詠った作品もある一方で〈私性〉を抑制して作句する傾向が強い。このため作者自身を含めて〈私性〉を物象化することで、自然というさまざまな物象と同位相に共時することが可能となる。つまり俳句作品には境涯作品を含めて主語あるいは主格の明示は必要なく、モノとモノとの関係性によって創出される「間主観的」な文芸であると言える。このためその作品は奄美の風土・気候に一体化しえるし、作者そのものの存在も奄美の空・海・島に同化しうるのである。奄美の俳句は、奄美の自然・祭事・農耕作物の収穫など季節のうつろいを取り込むことによって、シマに生きることの自覚を深くさせているのである。

（本稿は奄美群島で発行されている南海日日新聞に2018年11月16日に掲載された「つむぎ随筆」からの転載です）

## 奄美俳句を読む

大橋愛由等

奄美の俳句は島々の写し鏡である。

本紙（南海日日新聞）の毎月末に連載されている「なんかい文芸」の俳句を読み、そこから五句を選び、それぞれに選評をつけブログ「島唄生まれ」に発表している。2015年10月から始めた。一年分たると一冊の冊子にまとめ、「2015〜6年版」「2017年版」を作っている。

奄美の俳句はどんな特徴があるのだろうか。箇条書きにして書き出してみよう

①「なんかい文芸」に作品を毎月出しているのは、四つの俳句グループがあり10月から新たなグループがひとつ増えた。これに対して短歌グループは15と多い（他に川柳が1）。俳句人口の方が圧倒的に多い本土と逆転現象が起きている。短歌人口が多いのは、奄美の人たちの叙情性を培ってきたのは琉歌（八八六の30音字）であり、短歌は琉歌の叙情性に近似しているからではないだろうか。

②「奄美には夏と冬の二つの季節しかない」と言ったのは詩人の藤井令一氏だが、本土と気候が異なる奄美では、京阪地区で産まれた季語の大半が使えない。雪も百年に一度観測される頻度である。そこで奄美ならではの気候風土にあわせた季語・季感の創出と自律が求められる。奄美らしい季語として通用しうるシマグチは潤沢にあるし、



# 神戸詞あしび

126-2018.11.25 大橋愛由等



文楽「芦屋道満大内鑑」  
大阪国立文楽劇場のHPより

の歌う詞は、間近にみると表情が読み取れるし、しかも舞台上部に詞が電光掲示板に映し出さるので、視線はへ大夫・三味

人生二度目の文楽鑑賞である。  
11月19日(月)大阪国立文楽劇場へ向かった。  
演目は、「芦屋道満大内鑑」(葛の葉子別れの段/信田森二人奴の段)「桂川連理」(六角堂の段)「帯屋の段」(道行臙の桂川)。いずれも人気の人情ものである。  
全席指定なので、ネット上であらかじめ指定した席は、大夫(唄)と三味線がよく見える舞台正面に向かって右の席プロックを選んだ。  
多くの刺激があった。やはり伝統芸能は見どころがある。そのいくつかを箇条書きにしてみよう。  
①長竿の三味線を見た。かつて堺港に琉球からもたらされた三味線は本土に定着して、日本の風土に見合った変化をとげた。竿は長くなり、ピックにあたる撥も琉球のものより大きく異なり、流派によっても異なるようだ(沖繩は水牛の角を素材にしたツメを右指に差す。奄美大島は竹を細く切ったものを親指と人差し指ではさんで使う)。日頃、三味線を多く聞いている立場(ラジオ局で奄美シマウタの紹介番組パーソナリティを担当している)からして、もともとひとつの楽器だったのが、気候風土や文化が異なることで、かくも変容するものだというそのありように感動していた。  
②今回は人形遣いよりも大夫の唄を聞きに行ったというのが正直なところだろうか。人形は客席から見ると存外小さく、その表情を読み取るには、経験が必要に思われた。その点、大夫の歌う詞は、間近にみると表情が読み取れるし、しかも舞台上部に詞が電光掲示板に映し出さるので、視線はへ大夫・三味

## 文楽―泣き節の太夫 伝統芸能の深み堪能

線ボックス(舞台の人形遣い)「電光掲示板」の三点を交互に見るということになった。  
③今回は人気の人情ものが舞台上上がっていたので、客席は7-8割程度埋まっていた。客席は独特の熱い雰囲気には包まれていた。私は「昼の部」を観たのだが、「夜の部」では近松門左衛門の「女殺油地獄」が上演されていた。そう、わたしにとつて文楽とは近松門左衛門の脚本を愛読することから始まった。徹底して無駄を省いた文章は私の文体に大きな影響を与えている。原語と現代語訳が付された近松作品集の文庫はいまでも座右の書である(しかもその書はいまはもうなき旺文社文庫から出版されている)。言葉遣いが音楽的なのである。ここまで助詞を省くのかというぐらいに簡素化された文章は、すべて言い切らないゆえに抒情が醸し出されている。つまり舞台上での大夫の語り、人形の動きと連動するため、簡素化する必要があるのだと気が付かされた。その言葉運びの卓越さは近世日本語文学の到達点の一つだと信じている。  
④今回の舞台で何度も目を見張る場面があった。「芦屋道満大内鑑」における「葛の葉子別れの場面」で、大夫・竹本津駒大夫の詞うたいは絶品だった(三味線は竹澤宗助)。泣き節とはこういうものかと思いついた。母(狐)が子(安倍晴明)に泣きながら別れを告げる場面、津駒大夫は頭を台本に向けて激しく上下させながら語って歌い、その感情の入れ方は、まさにプロの芸だった。脱帽した。この場面を観ただけでも今回はここにきてよかつた満喫した。ああ伝統芸能おそろべし。  
⑤もともと今回の文楽鑑賞は私が大阪で働いていた時代に上演されていた「芦屋道満大内鑑」を見逃したくやしい思い出があるので、今回を見逃したら、あと何年も見ることができないだろうと焦ったことから決心したものだ。そしてタイトルには芦屋道満とあるが、道満が出てくる段は近年ほとんど上演されないことも今回知ったのである。

<p>詩と評論 月刊「Mélange」Vol.137 神戸</p>	<p>2018年11月25日 通巻137号 発行所/月刊「Mélange」編集部 〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F 編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人) maroad66454@gmail.com 定価 600円(税別)</p>
---	--